

JAMS の新たな門出

宮崎恒二(2010-11 年度会長／東京外国語大学)

2009 年 12 月の JAMS 総会で、日本マレーシア研究会は、日本マレーシア学会への改称を決定しました。ごく少数の有志によって立ち上げられた研究会は大きく発展し、外部から広く認知を得られる学会として、新たな出発点に立つこととなります。刊行が予定される学会誌への投稿や学会での発表が実績として強調できることは、とりわけ若い研究者の方々には大きな励みとなるでしょう。運営にあたる会員の負担は増しますが、学会となるメリットは大きいと考えられます。また、日本を代表する組織として、マレーシアの諸機関と連携を取る可能性も大きくなるのではないかと、期待がふくらみます。

学会になっても、研究者のみならず、広くマレーシアに関心を持つ人々、マレーシアに関わる活動に従事する人々に開かれた交流と情報交換の場としての JAMS の特徴は、是非維持していきたいと思えます。少人数の学会であるだけに、これまで通り、会員間の密な交流を通じて、相互に刺激を与え、研究と社会の接点としての役割を果たし、活動の幅を広げることに貢献できればと願う次第です。

さらなる飛躍をめざして

西尾寛治(2010-11 年度運営委員長／防衛大学校)

昨年 12 月に開催された会員総会において 2010-11 年度の運営体制が承認されました。過去 4 年間会長を務めていただきました原先生が勇退され、宮崎先生を新たな会長にお迎えすることとなりました。これまでの原先生のご助力に対し、厚く御礼申し上げます。

さて、宮崎新会長の下、金子さん、山本さん及びその他の方々とともに、私自身は引き続き JAMS の運営に関わっていくことになりました。来期の運営体制の布陣をみますと、こうした前期からのメンバーがある一方、今回新たに参加していただいた方々も少なくありません。とはいえ、「学会化」「会誌発行」などの新事業を通して JAMS のさらなる飛躍を目指す点では、新会長の下で皆心をひとつにしております。会員の皆様には、従来のご支援に深謝いたしますとともに、今後は旧に倍したご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

学会誌『マレーシア研究』の刊行に向けて

金子芳樹(2010-11 年度会誌編集委員長／獨協大学)

日本マレーシア研究会が日本マレーシア学会へと衣替えするにあたって、その名称とともに大きく変わるのは、レフェリー制度を備えた学会誌を刊行する点です。これまでも、会報としてそのボリュームと記事内容の濃さで定評のあった『JAMS News』を発行してきましたが、新たに刊行される『マレーシア研究』は本格的な研究論文と書評を掲載する学術誌となります。

一般に学会誌は、会員に研究成果を発表する場を与えるとともに、レフェリー制度を通して投稿者に査読者の評価やコメントを返し、その学術的水準を向上させる手助けをするという役目を担っています。特に若い研究者の方々には、後者の機能をぜひ積極的に利用していただきたいと思います。また、査読者となった会員には、単に学会誌としての水準を保つためのみならず、相互に研究の水準を高め合うという観点から、前向きにその任にあたっていただくようお願いします。

東南アジア地域をカバーする歴史の長い他の学会誌と伍してレベルの高い研究成果を発信できるような学会誌となるよう、会員の皆さんとともに育てていきたいと思います。編集委員会にて現在検討中の執筆要項などが整い次第、投稿の募集を開始する予定です。

学会化で変わらないもの

山本博之(2010-11 年度事務局長／京都大学)

このたび日本マレーシア研究会が日本マレーシア学会へと名称を変更することになりましたが、学会誌を刊行することを除けば活動内容に大きな変化があるわけではありません。このことは、JAMS がすでに学会としても十分に見劣りしない活動をしてきたためです。これまでに積み上げられてきた活動の基盤をしっかりと引き継いでいくとともに、それらを会員・非会員に利用しやすいような形に発展させていくことが今後の課題だと思っています。

その際に特に力を入れたいのが広報活動の充実です。JAMS にはウェブサイトがあり、これを通じた情報の発信をより一層効果的に行う仕組みを考えていきたいと思っています。また、『JAMS News』は、JAMS 設立から現在まで 19 年にわたって冊子体で発行されてきた歴史のある会誌となりましたが、今後は学会からの連絡や研究大会・地区活動の紹介を中心に電子版の会報として会員のみなさんにお届けすることになります。会員のみなさんには、短報等の寄稿を通じて会員どうしの情報交換の場として活用していただければと思います。ウェブサイトや会報へのご協力をこれまで通りお願いいたします。